

新生匠瑳戦略会議（第1回里山・檀林部会） 会議録（概要版）

開催日時：平成24年8月28日（火）

午後7時00分～9時00分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第3委員会室

出席委員：（学識経験者）渡辺新

（団体推薦者）萱森孝雄

（一般公募者）永野亮太、林暁男、八木幸市

（5人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）宇野充紘

（1人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ（永野部会長）

（省略）

3 議 事

（1）里山・檀林の問題点の整理と方向性について

- ・事前にお配りした資料を基に議事を進める。一番問題になってくるのは、里山・檀林をどのようにしたいのかということで、どうしたいのかが決まってくればスムーズに話が進んでくるのだと思う。
- ・この夏、世界自然遺産を2ヶ所（知床、小笠原）見てきた。世界遺産に登録されることで、それをうまくPRすれば見に来る人はいっぱいいる。現在、里山は生物多様性にとって非常に良い環境にあるため、見直されている。しかし、匠瑳市の里山はあまり注目されることがない。やはり、世界遺産のようなきっかけがないと、見直されないのかと思った。今ある里山の良いところを見つめ直して、それをうまく活用できる方法が見つかればよいのではないか。
- ・地元に住んでいる人の視点に立つと、地元ではどうやったら収入が得られるかという視点を中心になってくる。里山は将来有望であるというような夢があれば、自然

と動きは出てきます。負担ばかりで得する部分が見えないと、どうにもならないと思う。

- ・里山が見直されているということだが、全国どこにでもあるものなので、それだけでは魅力を感じないと思う。例えば、飯高檀林のように他にはなく、匝瑳市にしかないものと里山を絡めていかないと他との差別化ができないので、人が来てくれるという状態にはならないと思う。地元の人たちは里山や檀林を実際にどうしたいと思っているのか。
- ・飯高檀林で、ある程度の集客が見込めて、ある程度の販売ができて、生活の目途が立てば一番いいのだと思う。しかし、それは非常に難しい話なので、誰も手も足も出ず、ただ見ているだけの状態になってしまっている。気持ちとしては成田山のようになつてほしいと思っているが、そうなれる要素が飯高檀林にはない。
- ・飯高檀林の強みの一つとして巨木があると思う。それを強みだと地元の人が思っていることが重要で、それがないと前には進めない。
- ・飯高に住んでいる半分ぐらいの人は、飯高檀林のおかげでそこに根を下ろしたわけなので、やはり檀林を敬う気持ちを地元の人には持っていると思う。
- ・好きとか誇りに思うとか、そういう気持ちが原動力や出発点になるのだと思う。
- ・商店街と一緒に、地元の人にどうしたいのかを聞いても難しいと思う。里山というのは生活の場であり、生産の場でもある。山だけではなく、集落があって農地があって、その景観全てを里山と言う。ただ、生活の変化により里山は実際に荒れてきてしまっている。
- ・まず農業や集落などを含めた大きなフレームワークを作っていくべきで、実際にそれをどうしていくかは地元の人考えるべきことだと思う。
- ・水田に山の水を引いて米を作っているところがあるという話を聞いた。まったく新しいものではなく、既存のものをもっと上手にアピールすることも一つの方法である。
- ・生産から流通、加工まで含めたかたちで地域内に循環するような農業のあり方を考えて、そのフレームワークを提案することが戦略会議の役割だと思っている。
- ・生物多様性や自然保護に対して個人的に興味はあるが、地域資源を利用して何らかの特産品を考えるなど、生産や生活に結びついていかないと地元の人共感は得られないと思う。
- ・飯高檀林にもっと人が来るようになって外の目が入るようになれば、自然と周りから動き始めて「もっときれいにしなくては」という方向に向かっていくかもしれない。そういう気持ちで、檀林に桜を植えようとしたりいろいろ考えてはいるが、協

力者はあまりいない。

- 地元で生活している人たちがずっと住み続けられる、持続可能な地域づくりが必要になってくると思う。そのためには、地域内の循環や外からの交流も含めて、匝瑳市域のネットワークを作っていかなければならない。
- 水田に関わると多少の収入が得られるが、同様に山でも得られるものがあれば田舎の魅力につながると思う。維持・管理等の全ての負担が自分にのしかかってしまうと、サラリーマンになった方がいいという方向に向かってしまう。
- 里山を利用するときに、一番扱いに困っているのは竹だと思う。その困り物である竹を利用して、収入が得られるようなものがないか。これこそ、中間報告で示した価値の転換だと思う。
- 流通まで含めた販路を考える必要がある。農業をやっている人は生産現場が中心だが、現在は流通や加工まで手がけるようになってきている。ふれあいパークがうまくいっている一つの要因は、ここにあると思う。
- 資源はいろいろあるのに、ネットワークがないために活かしきれていないのが現状だと思う。人と人がつながるネットワークを作ることが大事で、そのために「私たちができることは？」と、市民に考えさせることができればいいのではないか。
- ネットワークをつくるときに、例えば農業と里山の関係や流通のしくみなど、現状を把握していないとネットワークは作れません。
- 市で、市内において個人的に活動している人の情報を集めて情報発信し、そこに集まってきた人たちのネットワークを作るといえるのはいかがか。まず、地域資源をたくさん利用するということが重要で、飯高檀林も年1～2回のレベルではなく、毎日使っていくことによって人との距離間も縮まるし、管理もしやすくなると思う。
- 生活や産業の視点で話をしてきたが、生物多様性や教育活動の視点も一つの利用方法だと思う。そういうことを具体提起に考えるときに、実際に里山に集まって、中間報告で示したワークショップなどを行えばいいのである。
- 余った枝でバイオマスを使って堆肥として田畑に利用したり、そういう田んぼをオーナー制にして、市外ではなく市内の人に利用してもらえば、地元でつながりができて生活も成り立つので、域内循環の可能性が広がると思う。
- 一人で考えてもなかなか前には進みません。旧野栄町の頃に「野栄いきいき農業塾」という組織があり、その一つの成果がチューリップ祭りである。これを匝瑳市域レベルで法人化し、いろいろな提案を検討していくと実際に動きが出てくると思う。
- 飯高檀林に本当に人が来てもらいたいのか、地元の人はどうなふうに考えているのか、これらは外部から来た人にはなかなかわからない。

- ・人がたくさん来てほしいというのは、観光地で来る人のイメージではなく、散策に来るような人のイメージだと思う。
- ・単に観光で来て素通りするのではなく、地元の人と関わって農業やものづくり体験をするような、そういうイメージだと思う。
- ・現在、民泊を考えているというのは、地元の一部で空き家が増えてしまっているからである。後継者はいるが、遠くに住んでいるため、普段は空き家状態になってしまっている。それをうまく活用して事業を起こせないかと考えている。
- ・日本の場合、グリーンツーリズムとかアグリツーリズムで事業展開していくと単なる観光農園になってしまう。そうではなく、もっと体系的に推進していかなければうまくいかない。
- ・かなり具体的で実現性のあるアイデアも出ているが、それがなぜ実現しないのかというと、事業化していく組織がないからである。そこで、市民と行政のパートナーシップで法人化した組織を作るべきだと思う。
- ・個人でいくら頑張ってもどうにもならないこともある。ある程度行政に関わってもらいと、それを利用する人も安心することができる。具体的な作業は市民がやるにしても、最初の窓口は行政が関わってくれた方がいいと思う。
- ・普段、都市部で生活していると星をじっくり見ている余裕がない生活をしているが、匝瑳市に帰って空を見上げると、やはりきれいな星が見えるとしみじみ感じる。
- ・地元の人間からすると、飯高檀林は教育の場なので、農業にしても里山にしても、飯高檀林で学んでいくという姿勢を通して、魅力を作っていく方がいいと思う。
- ・追い風となる外部の要因をどのように取り込んでいくか、自分たちが今後どうしていくのか、ここが決まれば展開は早い気がする。外部の専門家などに、地元の会がうまく機能するようにコンサルティングをしてもらってはいかがか。
- ・要介護にならない高齢者、つまり、病院や介護の世話にならない元気な高齢者というのは、全体の75%にあたるとのこと。デイサービスなどの福祉部門の高齢者ビジネスが注目をあびているが、対象者は全体の25%に過ぎない。逆に、これからは75%を対象としたビジネスを考えた方がいいのではないかという考え方もある。

(2) その他

次回の会議は、9月12日（水）午後7時から行う。